徳島新聞社提供

電子版へは ◀◀◀ こちらから

ニチスポ

駆け抜けた 最後の舞台

全力野球 家族へ恩返し

生光学園高・大西寿選手

甲子園という目標を奪われても、支えてくれた人たちへの感謝をプレーで表そうと、最後まで全力で白球を追った球児がいた。生光学園高3年のセンター・大西寿選手(18)もその一人。7月12日から8月5日まで全国高校野球選手権徳島大会の代替大会として行われた県高校優勝野球大会で頂点には立てなかったが「頑張り抜けた」と、ひたむきに流した汗をぬぐった。

寿選手には2学年上の兄・陽さん(19)がいる。野球を始めたきっかけも兄だった。「3歳の時、サッカーボールをバットで打って一緒に遊んだのが最初の野球かな」と寿選手は人なつこい笑顔を浮かべた。小学1年で兄と一緒に地元・東みよし町の足代スポーツ少年団に入団。女手一つで育ててくれる母真紀さん(42)とともに、休日は練習や試合に出かけた。

一緒にプレーするうちに「兄貴だけには負けたくない」というライバル心も芽生えた。力とスピードに勝る兄と、夢中で打ち込める野球は、ともにかけがえのない存在となった。生光学園中で硬式野球部に入って主将を務め、生光学園高に進んだ。小・中・高と兄と同じ道で野球を続けてきた。

高校1年の時だった。大学に進学し野球を続けることを望んでいたはずの3年生の兄が、就職するつもりだと聞いた。社会人野球を続けるわけでもないという。「ゆくゆくの僕の大学進学や、育ててくれた母への経済的負担を兄貴は考えてくれた」。就職先の愛知県内の病院には強豪の軟式野球部がある。兄は「おれは野球ができたらそれでいい。働きながらでもできる」と屈託なく笑った。

心が折れそうになった時、いつも支えてくれる兄だった。高校2年の冬、寿選手は交歓試合で結果が出ずレギュラー組を外された。この調子では大学進学も無理ではないかと弱気になり、兄に相談した。「就職してもいいかな」。兄は「どちらでもいい」と委ねてくれた。ただ、人づてに「弟の学費の面倒もみてやるつもり」という兄の決心も知った。

押しつけがましいところがない兄の心意気に、葛藤を抱えながら高校野球生活を送っていた寿選手は一念発起する。「ここで野球をやめてしまったら、兄貴を裏切ることになる」。練習中の積極的な声出しや居残り練習など、初心に戻ってグラウンドに立った。「技術より練習に取り組む意識を変えた」成果は復調とレギュラー組返り咲きにつながった。

8月2日、県優勝大会準々決勝が行われた鳴門オロナミンC球場のスタンドには、兄の陽さんと母の真紀さんの姿があった。兄の現役時代の背番号「8」を背負う寿選手は、実家にあった兄の背番号付きユニホームを着て試合に臨んだ。「ふがいないプレーはできない」。覚悟と感謝を込めた最後の夏。この試合で3安打3打点と気を吐いた。

甲子園への道が閉ざされた時も「やり切れよ」という兄の一言に励まされた。4日の準決勝で、保育所からの幼なじみでもある鳴門高のエース藤中と対戦。最後の打者となり、県内の頂点に立つという目標は果たせなかったが「一度は試合をすることさえあきらめかけた夏に真剣勝負ができた。ただただ楽しかった」と言えた。

大学で野球を続ける。「子供っぽく、年下のようにも感じる」という仲良しの兄に「けんかもしたし迷惑もかけたけど、いつかきっと、野球で恩返しがしたい」と寿選手。「まだお前には負けてないぞ」が口癖の兄や、ずっと欠かさず応援に来てくれた母の笑顔がこれからも宝物だ。

（野々村真吾）

県高校優勝野球大会の準々決勝で打席に立つ生光学園高の大西寿選手。同じ背番号だった兄・陽さんのユニホームを着て試合に臨んだ＝8月2日・鳴門オロナミンC球場

「迷惑をかけた母や兄に野球で恩返しがしたい」と話す大西寿選手＝生光学園高